

I 事業の概要

1 事業名

誰一人取り残さない地域社会の創造～子どもの人権と居場所づくり～

2 主催

北海道立生涯学習推進センター

北海道心の教育推進会議（北海道・北海道警察本部・北海道教育委員会）

3 開催日時

令和5年11月24日（金）13：30～16：45

4 開催場所

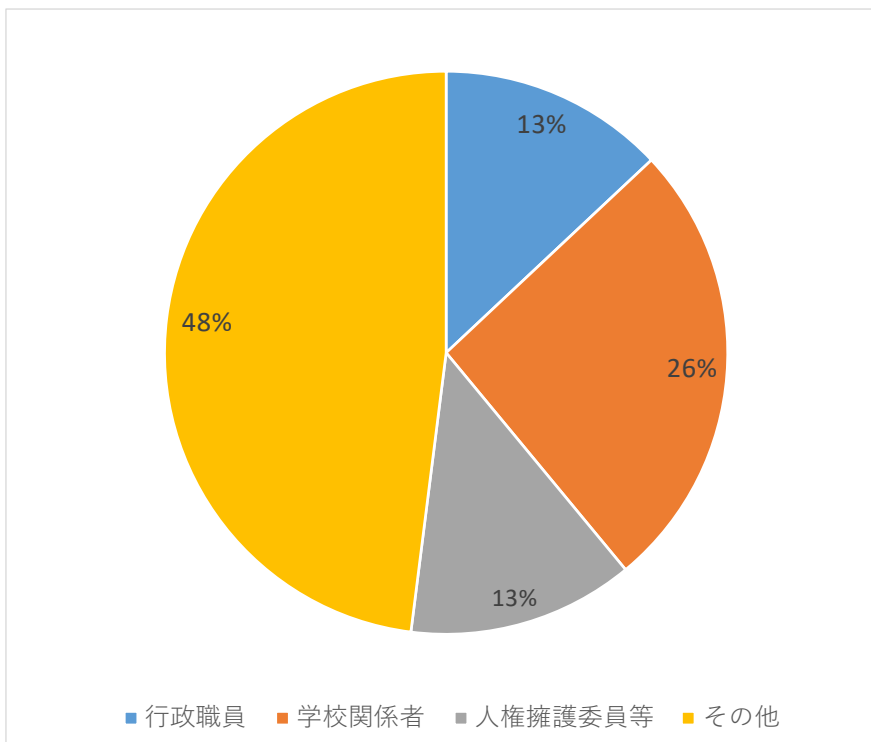
旭川市大雪クリスタルホール レセプション室

話題提供、鼎談はオンライン会議システムZoomで配信

5 参加人数

54名（会場参加22名、オンライン参加32名）

6 参加者の内訳



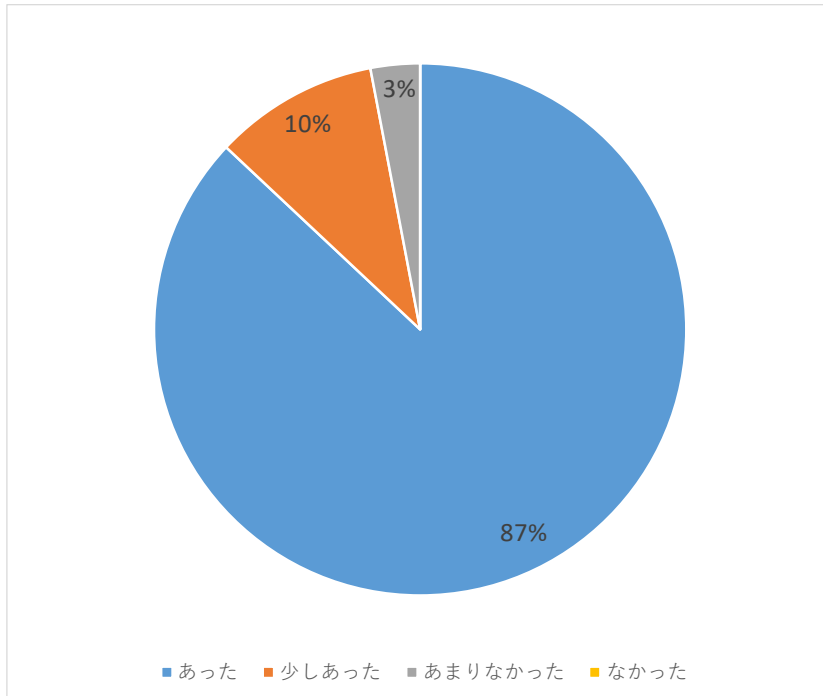
7 プログラム

11/24 (金)	13:15	13:30	13:40	14:00	15:30	15:40	16:10	16:25	16:35	16:45
	受付	開会式	情報 提供 (20分)	鼎談 (90分)	休憩	意見交流 (30分)	全体 交流 (15分)	まとめ (10分)	閉会式	

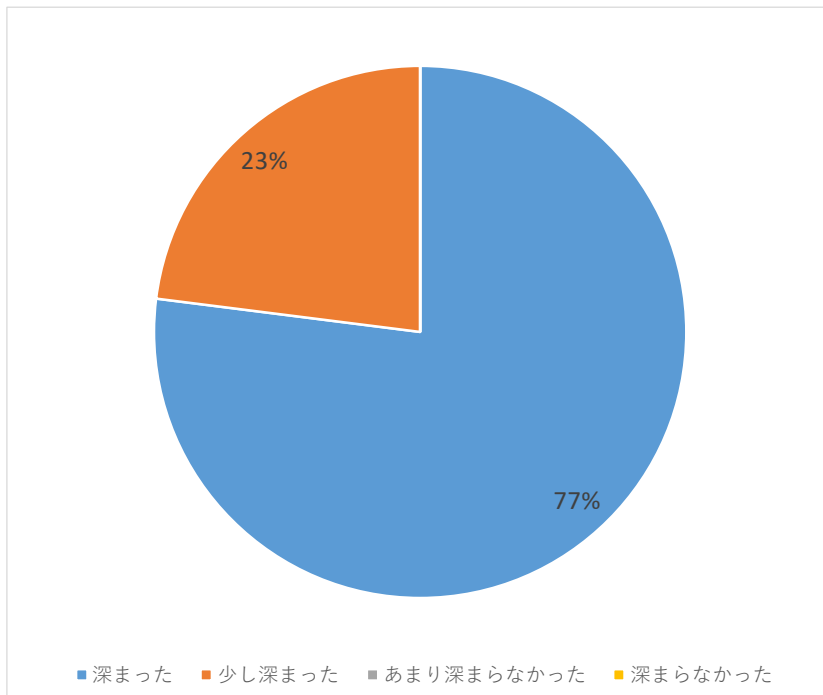
プログラム	講師等	内容
話題提供	【講師】 東北福祉大学准教授 清水 冬樹 氏	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの権利を具体化する子どもの居場所について、議論の枠組みを明らかにし、鼎談に向けての話題提供をした。
鼎談 「子どもの人権と居場所づくり」	【講師】 東北福祉大学准教授 清水 冬樹 氏 旭川おとな食堂代表 岡本 千晴 氏 NPO 法人大雪山自然学校代表理事 荒井 一洋 氏	<ul style="list-style-type: none"> 清水氏の進行により、「子どもと支援者の関係」「子どもと家族の関係」「子どもと地域の関係」「子どもと行政・学校」の4つの観点から子どもの参加・意見表明権を具体化する居場所の実際について議論を深め、参加者それぞれが自分事として考える機会とした。
意見交流・全体交流	【進行】 北海道立生涯学習推進センター 社会教育主事 廣川 貴志	<ul style="list-style-type: none"> 「子どもの居場所の未来を語ろう！」をテーマに、子どもの居場所の現在・過去・未来について会場参加者の意見交流・全体交流を行った。
まとめ	【講師】 東北福祉大学准教授 清水 冬樹 氏 旭川おとな食堂代表 岡本 千晴 氏 NPO 法人大雪山自然学校代表理事 荒井 一洋 氏	<ul style="list-style-type: none"> 講師の先生方からこの研修会のまとめとして、一言ずつ全体の講評をいただいた。

II 参加者アンケート結果

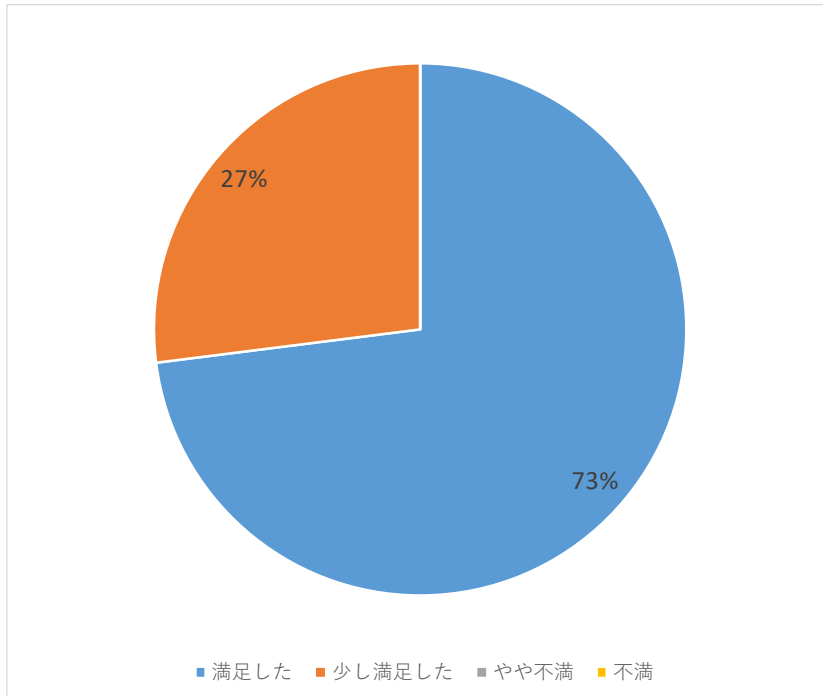
1 今回の研修会に参加する以前に「子どもの人権」「子どもの居場所づくり」についての関心や理解がありましたか。



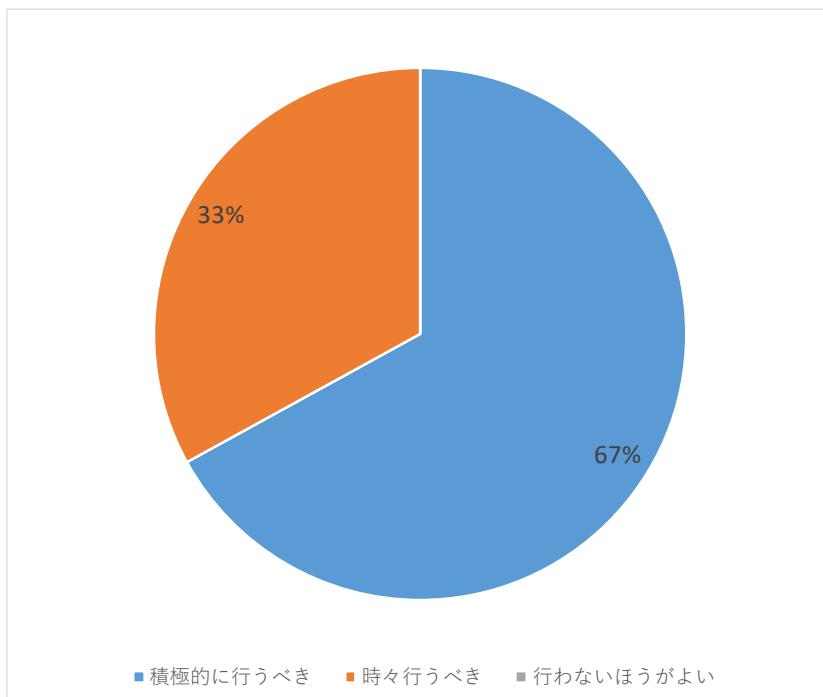
2 今回の研修会に参加して「子どもの人権」「子どもの居場所づくり」についての関心や理解は深まりましたか。



3 今回の研修会の内容は、満足のいくものでしたか。



4 今後もこのような研修会を行うべきだと思いますか。



5 今回の研修会で一番大切だと感じたことは何ですか。

- ・ 特定の子どもだけではなく、全体的に平等に接する事が次に繋がるのかなと感じました。
- ・ 大人は子どもを教育しようとする裏に、支配しようとする危険性があると「かもしれない」運動を展開していきたいと思った。こどもの意見は？こどものしたいことは？と問いかけることが大切だと感じた。
- ・ 「子どもとの対話」の重要性です。それにより、家庭の状況が見えてきたり、その子の性格が見えてきたりして、こちらの声掛けも（いい意味で）変わってくる、ということを受けて、なるほどなあと感じました。
- ・ 子ども自身が、困っているという事を発信できるとは限らない。そもそも、自身の環境について当たり前だと思っているので、問題があっても認識できず、認識できたとしてもそれを他者に伝えて助けを求めることができない。発信しやすい環境をいかに大人が作ってあげられるか。
- ・ 子どもの人権が脅かされている現状を、社会全体でどのように解決していけばよいのか。
- ・ 子どもの思いや願いを、大人がどのように受け止め、子どもに寄り添うべきか。
- ・ 専門職ではない地域の人たちが、今後どのように子どもたちと関わりを創ればよいのか。
- ・ 教職員の立場から行政に入っているので、行政の立場で「人、モノ、金、情報」の構造をどのように整えているかを知り、学校現場でそれを最大限に活かすにはどうすればよいのかについて考え、可能な限り提案していくことが大事だと感じました。
- ・ 子どもに考えさせる機会を与えること。「川下り体験→河原で遊ぼう」「カレーライスづくり→この材料で何をつくろうか」
- ・ 学校以外での様々なところでも子どもの居場所について考え、対応されている方がいることを知りました。そこでも情報の共有の仕方について悩んだり、対応を模索されたりしていることがわかりました。居場所を求めている子ども達は、どこに自分の居場所を見つけるかわかりません。様々な場所で活動されている方々と上手に情報共有し、協力しあって子ども達の居場所づくりができることが大切と思いました。
- ・ 子どもが意思表示できる環境を整えていくこと、子どもが安心して過ごせる場所を増やしていくことが大切だと思いました。
- ・ 意見表明権の場に参加できる子どもと、貧困家庭や虐待を受けている子どもへの関わりポイントにも、それぞれ違ったはしごがありそうだ。
- ・ 第一段階で子ども側から状況を聴く、課題を教えてもらうという姿勢が必要である。
- ・ 普段どんなことを感じているか？「もっとこうだったらいいのに」「なんか嫌だ」といった、聴き取りを通じた目標設定や、課題解決を行うことで、お飾り参画を防げるのではないか。
- ・ 子ども達に、支援に関わる大人を今ここにある資源として見てもらう。あなたの隣で一緒に考える人だよ、というメッセージが伝われば、子ども自身が発信しやすくなる。大人側にも年が上だから権利も上という錯覚を起こしにくくする。
- ・ 子どもとのつながりは出てくるが、保護者とのつながりが見えてこないという内容に、勉強させていただきました。連携のあり方が問われているな感じています。

- ・子どもは何もかも見破ると思って真摯に関わらせてもらう感覚が一番ではないかと感じた。「子どもの側に立って子どもと同じ高さの目線で考えたり話したりすること」「子どもの居場所では『えらそうに大人ぶる』ことなく誤りを認められるのが好ましいこと」
- ・まずは知ること
- ・人権の奥深さ
- ・子どもとの信頼関係を築くこと。
- ・弱者への共感。マジョリティーの特権への気づき。
- ・言語コミュニケーションが苦手な親、子どもへの対応。
- ・子どもの成長に促す上で他機関のつながりが不可欠であり、社会教育士や地域コーディネーターの存在が重要な役割を果たすこと。
- ・子どもが安心できる場所があるということは、大人（保護者）にとっても安心できる地域となり得るということ。
- ・こどもの見えない（見えづらい）貧困、虐待等の問題をどのようにして把握していくかが、大きな課題と感じた。

6 その他、感想やお気付きの点があればお聞かせください。

- ・実際に子どもたちと向き合って活動されている講師の皆様の体験を聞くことができたことが何よりの勉強になりました。今後の学校経営に活かしてまいります。
- ・生活の中で「子ども食堂」について知る場面がなく、実際に活動をされている岡本さんのお話を聞くことが出来て、とても勉強になりました。しかしながら、おとな中心になっているのではないか、という問題提起も大変考えさせられるものでした。
- ・大人も自分の知っている言葉や範囲の中でしか理解できないというのは本当にそうだなと感じます。子どもの感じ方や考えに対して、自分のものさしや枠組みの中だけで理解し対応しようとする、子どもにとっては時に暴力的になってしまう場合もあります。子ども自身の気持ちを置き去りにしない支援や対応が何より必要だと感じます。
- ・人権教育は学校でも人権擁護委員さんを招いて実施している。自分や他者を大切にする。思いやりの気持ちをもって生活するなど、これからの時代はより大切になってくると考える。
- ・他機関への情報共有において、個人情報はどう扱うべきか、子どもの様子をどこまで交流するべきかが検討課題であることを理解できました。
- ・国連人権理事会からジェンダー平等など、遅れを指摘されている日本。子ども施策においても子どもの権利委員会から勧告されている事を恥ずかしながら再確認する。「私にもあなたにも人権があってお互いに侵してはならない」という教育がすっぱり抜け落ちたかのような、全ての歯車がちぐはぐで噛み合わない現状。実は同根なのではと思うことがある。私たち大人は色々なシーンで人権について話題にすることができる。行政やNPOは率先して人権感覚の普及に取組み、地域の中で誰ひとり取り残さないと覚悟。そうした地域活動が増える事、地域同士や企業をまきこんで繋がるエネルギーを意識して仕事に臨みたい。

- ・オンラインで参加側の音響チェックがしたい。会場の問題なのかこちらのPCの問題かわからないまま始まってからトラブルに気づくと困るので始まる前に音楽や声をかけるなどしていただけますと大変助かります。
- ・子ども食堂や自然学校の運営方法や維持、推進していくことの大変さや課題を共有できると良かったです。(ボランティアなのか、今後も継続可能なのか、これらが無い自治体で開催していくにあたっての準備や課題について) また、学校等の集団活動において、そこに馴染めない子への対応について考え、その子どもたちの将来の展望が明るい社会になって行くためにはどのようにすべきかを考えながら参加させていただきました。
- ・学校という「箱」の中で、子ども自身が参加・意見表明権を具体化するために、「参加のはしご」という考えをなるべく多くの教員が共有できると良いと感じました。いわゆる「いい学級」は参画の段階がかなり進んでいたのではないのでしょうか。
- ・「家庭」「地域」「学校」が一体となり、子どもの成長を支え見守る体制が不可欠であることが理解できました。そのためには、子どもとの信頼を築き、心を開いてもらうための心のゆとりが大人には必要であることが分かりました。
- ・話を聞く場面と意見交流できる場面のバランスがよく、あっという間の時間でした。
- ・大変勉強になりました。
- ・子ども食堂の役割は世の中に誤解されている、誰が利用してもよいと聞き、私自身誤解していたと感じた。万民に門戸を開き果たして運営が成り立つのか？これを知らない人が多いのは、報道や広報の問題だと感じる。真に支援を必要としている子どもが負い目を感じない環境を創りたいならば、その意識で報道、広報しなければ実現しないのでは？我が家は完全に子どもを行かせてはいけないと認識していた。また、子ども食堂を通じ子どもだけでなくその保護者の支援にもつなげたい意識はあるのか？あるとすれば、弁護士その他の社会資源との連携は考えておられるのか？できれば何らかの形でご回答をいただけると大変ありがたい。

講師 岡本 千晴 氏より

こども食堂の役割として、こども食堂を好きになって自分の居場所だと感じてもらいたいという思いがあります。地域の繋がりや交流を目的に行っている場合もあります。先日もお話しましたが、子ども食堂は、規格がないので、色々な視点で色々なやり方があると思っています。「子ども食堂は、食べられない人がいくところだから、うちは行かない」とおっしゃる方々の気持ちとして、恐らく報道で「貧困世帯がいくところ」と聞いて、必要な方の分が一つ減ってしまうと思ってしまう温かい気持ちなのだと思えます。

報道については、何度か新聞記者さんにお伝えしたことがあります。世の中の的に、子ども食堂の報道も変化しているように感じてはいます。「こども食堂は、生活に困窮している方がいくところ」という子ども食堂ならば、本当に生活に厳しい方は、行きにくくなると思うのです。どうでしょうか。「あなたの家大変だから、子ども食堂に来ない？」と言われた子ども達は、絶対に子ども食堂には足を運ばないと思います。偏見や差別に繋がってしまいます。(子ども食堂に来ている子ども

=貧しい子ども)。

子ども食堂は、大勢の色々な方がいて、誰もが利用でき、その中でさりげなく包み込む場所なのかなと考えています。そして、子ども食堂に行く、行かない、利用する、しないは、支援者が決めることではなく、子ども達や親子が決めることなのかなと考えています。

保護者支援については、実際に子ども食堂を通して出会う親子で支援が必要な方もおり、色々な社会資源と繋がる事もありますし、連携も考えております。

講師 清水 冬樹 氏より

報道と広報は一応分けて考えていただきたいということがあります。担い手の方々は必ずしも広報を得意とされていないためです。またメディア等の報道についても、基本は記者の方やデスクの判断があるので、我々からお願いができて指示をすることは残念ながらできません。こうした取り組みに対して誤解が生じるという懸念について、ぜひ現地に足を運んでいただくのが一番だと思います。子どもたちの力強く生きる姿を目の当たりにすることができるかと思えます。

また、弁護士等との連携についてですが、おそらく担い手の方々が連携を意図するより、専門職が連携を持ちかけることが本来的な役割だと思います。担っていらっしゃる方々は一市民です。連携は結構専門性の高い取り組みで、一市民が簡単に取り組めることではありません。市民ができること、専門家・専門職が本来的にすべきことをつなぎ合わせながら子どもにやさしいまちが形成されていることが求められると思います。